広島女学院同窓会
東京支部ニュース
編集・発行　東京支部役員会
2018. 6. 1
第 71 号

今年度の聖句

一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

コリントの信徒への手紙（一）12 章 26 節

凡てのこと相働きて益となる

広島女学院 院長・学長　湊 晶子

2014 年に就任して思いもかけない出来事に直面し只々驚きと失望を覚えつつも「広島県で唯一の歴史あるキリスト教女子教育機関を護らなければ」と夢中で走りぬいた 4 年間でした。28 歳で教壇に立ち、今回 4 つ目の大学で初めて経験した危機的状況でしたが、これまでの経験と蓄積された人脈の助けを得て、夢中で復活のために走り続けることが出来ました。

一度改革に失敗すると完成年度までの 4 年間は動かすことは出来ません。新しい構想を立て、全学一致で着々と準備を進め、今年の入試では「再改革した体制」で学生募集が出来るところまでこぎつけました。社会的理解を得て、遂に恒常的な定員割れから解放され、定員の 1.3 倍（補助金減額の限度数）の入学者が与えられました！亀裂が入ってしまっていた中高との関係も見事に修復され、温かい交流も回復し、本当に感謝です。

本学も含め同じような問題を抱えていたいくつかの女子大学は一昨年、昨年と続けてクローズされました。その様な中で私は本学の存続のために日夜祈りつつ、「現代を生かすライフキャリア教育」に舵を切り、全面改革に踏み切りました。改革初年度の 2018 年度の入試で、定員の 1.3 倍を満たすことが出来ましたことは感謝に堪えません。

「凡てのこと相働きて益となる」と言うタイトルの言葉は、文語訳聖書ロマ書8章28節の言葉です。大切な事は、「神を愛するもの、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、」と言う前半の言葉です。私は就任後問題を掌握して以来毎朝 6 時に起床、聖書を読み広島女学院の復活のために祈り始めました。全学教授会でもすべての先生方の前に聖書を並べ、その時々に必要な聖句を読み、祈りを共に致しました。また、キャンパス内で聖書研究会を持ちたいと願い、超多忙の中テキストを執筆、5 回に亘って開催。東京、名古屋、京都等遠くから卒業生や、一般の方々が毎回 200 名前後も集まって下さいました。主は生きて働かれる方。心から感謝致します。

広島女学院全学院一致で学長の二期目をお願いされ、力不足ですがお引き受け致しました。これまでの温かいご支援に感謝するとともに、これからも変わらぬ声援をお願い致します。

東京支部主催　2018 あやめの会

迎賓館赤坂離宮とランチ

今年で５回目を迎える“あやめの会”は、昨年のクリスマス会の際にリクエストをいただいた迎賓館の見学を企画いたしました。迎賓館は観光振興のため一般公開されています。

この機会に、首脳会談、晩餐会などが開催される迎賓館にご一緒しませんか。お誘いあわせの上、奮ってご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

まずは紀尾井町のレストラン「オーバカナル」でランチをいただきながら交流を楽しみ、その後、迎賓館に向かいます。参加ご希望の方は、下記連絡先までお申し込みください。他支部の方も歓迎いたします。

2018 年 6 月 24 日（日）

集合：１１時３０分（レストランに直接お越しください。）

会場：オーバカナル紀尾井町（AUX BACCHANALES）千代田区紀尾井町 4-1 新紀尾井町ビル 1F

東京メトロ銀座線、丸ノ内線　赤坂見附駅　出口Ｄ

東京メトロ半蔵門線、有楽町線、南北線　永田町駅　出口７

会費：３６００円（ランチと迎賓館入場料）＊迎賓館までのタクシー代 別途

人数：先着４０名

申込：６月１４日（木）まで

（満席になった時点で締め切ります）

申込先

（お名前、電話番号、卒回をお知らせ下さい）

木村　090-7941-5674

remifuku03301225@gmail.com

氏原　080-4320-3723

＊雨天決行

＊歩きやすい服装と靴でお出かけください。

＊迎賓館で急遽接遇が行われ一般公開が中止になる場合には、レストランでの会食のみとなります。

神奈川支部 ランチ（飲茶）クルーズのご案内　～ロイヤルウィングで巡る横浜港～

日程：６月１３日（水）

集合：１１時１５分（時間厳守）

場所：大桟橋 チケットカウンター前

会費：２５００円（当日集金）特別割引！

人　数：先着４０名

申　込：６月５日まで（ｷｬﾝｾﾙ 6 月 11 日まで）

申込先：常泉　046-293-6175

中村　090-5801-0920

ミャンマーに行きましょう！

清水冨士子（栩木/高 14 回）

前号の支部ニュースに、「ミャンマーに行きませんか？」というお誘いの文を載せていただきました。皆さまからの寄付金でミャンマーの村に学校が１校建てられています。その開校式に出席しましょう、というお誘いでした。詳しいスケジュールがまとまりましたのでご案内いたします。ミャンマーの子供たちの生き生きとした目、人懐こい仕草、そしてミャンマーの美しい自然に会いに行きましょう！

2018 年	スケジュール
10 月 16 日（火）	午前の飛行機にて成田からヤンゴンへ、夕方ヤンゴン着　　ヤンゴン市内宿泊
10 月 17 日（水）	ペーヨンセー小学校開校式に出席、テンゴン村の小学校訪問　ヤンゴン市内宿泊
10 月 18 日（木）	午前の飛行機にてバガンへ、バガン観光　　バガン宿泊
10 月 19 日（金）	午前の飛行機にてインレー湖へ、インレー湖や周辺観光　　インレー湖宿泊
10 月 20 日（土）	インレー湖観光　　インレー湖宿泊
10 月 21 日（日）	午前の飛行機でヤンゴンへ、ヤンゴン市内観光、夜の飛行機で日本へ　　機内泊
10 月 22 日（月）	午前　成田着

旅行代金

成田 ― ヤンゴン　往復飛行機代金　￥92,440（日本で支払い）

ミャンマー国内旅行代金　US＄1,120（国内線飛行機、ホテル、車、ガイド料など　/　現地で支払い）

合計（概算）￥215, 000.－

✧　旅行代理店が関わっていないので、市販のツアーより 10 万円位安くなっています。

✧　別途、現地での昼食・夕食代も必要ですが、物価は安いです。

✧　ホテルは一人一部屋を確保します。

申し込み

- メールか郵便で、お名前、住所、電話番号を明記の上、お申し込みください。

  メール　greengarden@nifty.com

  郵便　〒125-0033 東京都葛飾区東水元５－４１－１３　清水冨士子　宛て
- 先着１０名までで締め切らせていただきます。６月１０日までにお申し込みください。
- 問い合わせ：清水　自宅　03-3600-3012、携帯　090-8516-4167

※ 前号の支部ニュースでの報告以降、同窓生の皆さまから 173,000 円の寄付金が寄せられ、古庄さんが 5 月にミャンマーへお持ちくださいました。心から感謝いたします。

東京支部「手芸部」発足のお知らせ

同窓会本部のバザーに参加させていただくこと等を目標に、作品制作などを通して皆さまと親睦を深めたいと思っております。

今後、**以下のような方法でご協力いただける方を大募集**しております！

手芸好きな方はもちろんそうでない方も大歓迎です。布の裁断やラッピングなど、みんなで集まってお喋りしながら手を動かしませんか？

・布やラッピング用リボンなど材料の寄付
・手作り品の献品
・作品制作会への参加（8 月を予定）

ご協力いただける方、とりあえず情報がほしい方、活動に関するアイディアをお持ちの方、その他のお問い合わせなどありましたらぜひこちらまで👇ご連絡ください。

***e255884@gmail.com / 090-3689-5960* 小林悦子（高校 46 回）**

2017 クリスマス会に参加して

１２月２日（土）、銀座教会で東京支部のクリスマス会が開かれ、５４名の同窓生が出席しました。

第１部は大礼拝堂におけるクリスマス礼拝です。高橋潤牧師は１１月１日発行の東京支部ニュースをお読みいただいていたようで、説教の中でそれに触れてくださいました。特に心に残ったものとして、星野校長による日野原先生の記事、そしてミャンマーの貧しい子供たちのために学校を建設する活動についての記事をあげてくださり、私たちも深い感慨を覚えました。

第２部は場所を５階の『ぶどう』に移しての茶話会です。様々な年代の『ゲーンズの娘たち』はこの日ばかりは学生にもどってよく笑い、よくしゃべり、讃美歌を歌い、大いに楽しみました。

歓談の中で山田玲子さん（高５）が核廃絶運動の現状を報告。皆で署名に協力しました。また私もミャンマーの学校建設の進展状況の報告をさせていただき、その場で４万３千円もの寄付が集まりました。有難く深く感謝いたします。

高齢のお母様と母娘で参加された方、幼い子どもを抱えて奮闘している若いお母さんなど、色々な事情を持った方たちも、優しい人たちに囲まれ、リラックスしたひと時を過ごせたことでしょう。

高校１４期の同窓生７人のお手伝いで、洗い物もあっという間に片付き、こうしてクリスマス会は楽しくにぎやかに終了しました。来年はもっと多くの同窓生が参加できるといいですね。

清水冨士子（栩木/高 14・大英 14）

サーロー節子さんのメッセージは私達への最高の贈りもの！

サーロー節子さんは、広島女学院高等女学校 2 年生の時に爆心地より 1.8km 離れた学徒動員先で被爆されました。1954 年に広島女学院大学英文学部英文学科卒業後、米国に留学。その後、結婚を機にカナダ・トロントに移り住み、原爆にまつわるご自身の経験を英語で伝える活動を長年続けてこられました。国際 NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）が 2007 年に発足した時から行動を共にし、ICAN の「顔」として、国際会議や国連での核兵器禁止条約交渉会議で被爆者として体験を語り、2017 年 7 月 7 日の国連本部での核兵器禁止条約採択に貢献されました。その後、2017 年ノーベル平和賞に ICAN が選ばれ、その授賞式が 12 月 10 日、ノルウェーのオスロ市庁舎にて執り行われた際、サーローさんは ICAN のベアトリス・フィン事務局長と共に登壇してメダルと証書を受け取り、受賞スピーチをされました。同窓生の誇りである、国連での核兵器禁止条約採択後のスピーチ並びにノーベル平和賞の受賞スピーチの全文を日本語訳と共に掲載します。

＜ 国連での核兵器禁止条約採択後のスピーチ ＞

Delegates, NGO colleagues, dear friends, I never thought I would see this moment. I would like to share my gratitude for the exceptional work and dedication of everyone who has put their brains and their hearts into these treaty negotiations.

I am grateful to you Madame President for your leadership and the UN Secretariat, the delegations and NGOs, devoted to moving us ever closer to the goal of the total elimination of nuclear weapons.

As we gather in our celebration of this extraordinary achievement, let us pause for a moment to feel the witness of those who perished in Hiroshima and Nagasaki. Both at that time in August of 1945, and over these 72 years, 100,000 of people, each person who died had a name. Each person was loved by someone.

I've been waiting for this day for 7 decades. And I am overjoyed that it has finally arrived. This is a beginning of the end of nuclear weapons. I remember back in 2014 when many of us met in Nayarit, Mexico. The conference chair said, "This is a point of no return".

We will not return to the failed nuclear deterrence policies.
We will not return to funding nuclear violence instead of human needs.
We will not return to irreversibly contaminating our environment.
We will not continue to risk the life of future generations.

To the leaders of the countries across the world, I beseech you, if you love this planet, you will sign this treaty. Nuclear weapons have always been immoral. Now they are also illegal. Together let us go forth and change the world.

各国代表、NGO の仲間たち、親愛なる友人の皆さん、私は、この瞬間を見届けることができるとは、思ってもみませんでした。私は、この条約交渉に知恵と真心のかぎりを尽くしてくださった全ての方の類まれなるお働きと献身に、感謝を捧げたいと思います。

ホワイト議長のリーダーシップ、国連事務局、各国代表、NGO の皆さんの献身が、核兵器廃絶という目標に、私たちをいよいよ近づけて下さったことに感謝します。

私たちはこの驚くべき成果を祝うために集っているわけですが、ひととき立ち止まって、ヒロシマとナガサキで命を奪われた方々の声に、思いをはせてみましょう。1945 年 8 月のあの時と、その後 72 年の間に亡くなった数十万人の方たちです。亡くなった方々はそれぞれ、名前を持ったひと、でした。誰かに愛されたひとたち、だったのです。

私は 70 年あまりにわたって、この日を待ち続けてきました。そして、大変うれしいことに、その日がとうとう訪れたのです。今日こそ、核兵器の終わりの始まりです。私たちの多くがそこにいた、2014 年のメキシコ・ナヤリットでのことを思い起こします。議長はおっしゃいました。「もはや後戻りできないところに至りました」と。

私たちは、失敗した核抑止政策に後戻りすることはしません。
私たちは、ひとに必要なものを削って核暴力に投資するようなことへ後戻りいたしません。
私たちは、取り返しのつかない環境汚染へと後戻りいたしません。
私たちはこれ以上、未来の世代のいのちをおびやかすようなことはいたしません。

世界中の指導者の皆さん、切にお願いします。もしあなたがこの地球を愛しているなら、どうかこの条約に署名してください。核兵器はこれまでもずっと、道徳に反するものでした。そして今や、法に反するものとなりました。一緒に前に向かって進み、世界を変えていきましょう。

日本語翻訳　　広島女学院 院長・学長　湊 晶子 先生

＜ ノーベル平和賞受賞スピーチ ＞

Your Majesties,
Distinguished members of the Norwegian Nobel Committee, My fellow campaigners, here and throughout the world, Ladies and gentlemen,
It is a great privilege to accept this award, together with Beatrice, on behalf of all the remarkable human beings who form the ICAN movement. You each give me such tremendous hope that we can -- and will -- bring the era of nuclear weapons to an end.

I speak as a member of the family of hibakusha -- those of us who, by some miraculous chance, survived the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki. For more than seven decades, we have worked for the total abolition of nuclear weapons.

We have stood in solidarity with those harmed by the production and testing of these horrific weapons around the world. People from places with long-forgotten names, like Moruroa, Ekker, Semipalatinsk, Maralinga, Bikini. People whose lands and seas were irradiated, whose bodies were experimented upon, whose cultures were forever disrupted.

We were not content to be victims. We refused to wait for an immediate fiery end or the slow poisoning of our world. We refused to sit idly in terror as the so-called great powers took us past nuclear dusk and brought us recklessly close to nuclear midnight. We rose up. We shared our stories of survival. We said: humanity and nuclear weapons cannot coexist.

Today, I want you to feel in this hall the presence of all those who perished in Hiroshima and Nagasaki. I want you to feel, above and around us, a great cloud of a quarter million souls. Each person had a name. Each person was loved by someone. Let us ensure that their deaths were not in vain.

I was just 13 years old when the United States dropped the first atomic bomb, on my city Hiroshima. I still vividly remember that morning. At 8:15, I saw a blinding bluish-white flash from the window. I remember having the sensation of floating in the air.

As I regained consciousness in the silence and darkness, I found myself pinned by the collapsed building. I began to hear my classmates' faint cries: "Mother, help me. God, help me."

皆さま、
この賞をベアトリスとともに、ICAN運動にかかわる類いまれなる全ての人たちを代表して受け取ることは、大変な光栄です。皆さん一人一人が、核兵器の時代を終わらせることは可能であるし、私たちはそれを成し遂げるのだという大いなる希望を与えてくれます。

私は、広島と長崎の原爆投下から生き延びた被爆者の一人としてお話をします。私たち被爆者は、70年以上にわたり、核兵器の完全廃絶のために努力をしてきました。

私たちは、世界中でこの恐ろしい兵器の生産と実験のために被害を受けてきた人々と連帯しています。長く忘れられてきた、ムルロア、インエケル、セミパラチンスク、マラリンガ、ビキニなどの人々と。その土地と海を放射線により汚染され、その体を実験に供され、その文化を永遠に混乱させられた人々と。

私たちは、被害者であることに甘んじていられません。私たちは、世界が大爆発して終わることも、緩慢に毒に侵されていくことも受け入れません。私たちは、大国と呼ばれる国々が私たちを核の夕暮れからさらに核の深夜へと無謀にも導いていこうとする中で、恐れの中でただ無為に座していることを拒みます。私たちは立ち上がったのです。私たちは、私たちが生きる物語を語り始めました。核兵器と人類は共存できない、と。

今日、私は皆さんに、この会場において、広島と長崎で非業の死を遂げた全ての人々の存在を感じていただきたいと思います。皆さんに、私たちの上に、そして私たちのまわりに、25万人の魂の大きな固まりを感じ取っていただきたいと思います。その一人ひとりには名前がありました。一人ひとりが誰かに愛されていました。彼らの死を無駄にしてはなりません。

米国が最初の核兵器を私の暮らす広島の街に落としたとき、私は13歳でした。　私はその朝のことを覚えています。
8時15分、私は目をくらます青白い閃光（せんこう）を見ました。私は、宙に浮く感じがしたのを覚えています。

静寂と暗闇の中で意識が戻ったとき、私は、自分が壊れた建物の下で身動きがとれなくなっていることに気がつきました。私は死に直面していることがわかりました。私の同級生たちが「お母さん、助けて。神様、助けてください」と、かすれる声で叫んでいるのが聞こえ始めました。

Then, suddenly, I felt hands touching my left shoulder, and heard a man saying: "Don't give up! Keep pushing! I am trying to free you. See the light coming through that opening? Crawl towards it as quickly as you can." As I crawled out, the ruins were on fire. Most of my classmates in that building were burned to death alive. I saw all around me utter, unimaginable devastation.

Processions of ghostly figures shuffled by. Grotesquely wounded people, they were bleeding, burnt, blackened and swollen. Parts of their bodies were missing. Flesh and skin hung from their bones. Some with their eyeballs hanging in their hands. Some with their bellies burst open, their intestines hanging out. The foul stench of burnt human flesh filled the air.

Thus, with one bomb my beloved city was obliterated. Most of its residents were civilians who were incinerated, vaporized, carbonized -- among them, members of my own family and 351 of my schoolmates.

In the weeks, months and years that followed, many thousands more would die, often in random and mysterious ways, from the delayed effects of radiation. Still to this day, radiation is killing survivors.

Whenever I remember Hiroshima, the first image that comes to mind is of my four-year-old nephew, Eiji - his little body transformed into an unrecognizable melted chunk of flesh. He kept begging for water in a faint voice until his death released him from agony.

To me, he came to represent all the innocent children of the world, threatened as they are at this very moment by nuclear weapons. Every second of every day, nuclear weapons endanger everyone we love and everything we hold dear. We must not tolerate this insanity any longer.

Through our agony and the sheer struggle to survive -- and to rebuild our lives from the ashes -- we hibakusha became convinced that we must warn the world about these apocalyptic weapons. Time and again, we shared our testimonies.

But still some refused to see Hiroshima and Nagasaki as atrocities -- as war crimes. They accepted the propaganda that these were "good bombs" that had ended a "just war". It was this myth that led to the disastrous nuclear arms race -- a race that continues to this day.

そのとき突然、私の左肩を触る手があることに気がつきました。その人は「あきらめるな！（がれきを）押し続けろ！蹴り続けろ！あなたを助けてあげるから。あの隙間から光が入ってくるのが見えるだろう？そこに向かって、なるべく速く、はって行きなさい」と言うのです。私がそこからはい出てみると、崩壊した建物は燃えていました。その建物の中にいた私の同級生のほとんどは、生きたまま焼き殺されていきました。私の周囲全体にはひどい、想像を超えた廃虚がありました。

幽霊のような姿の人たちが、足を引きずりながら行列をなして歩いていきました。恐ろしいまでに傷ついた人々は、血を流し、やけどを負い、黒こげになり、膨れあがっていました。体の一部を失った人たち。肉や皮が体から垂れ下がっている人たち。飛び出た眼球を手に持っている人たち。おなかが裂けて開き、腸が飛び出て垂れ下がっている人たち。人体の焼ける悪臭が、そこら中に蔓延（まんえん）していました。

このように、一発の爆弾で私が愛した街は完全に破壊されました。住民のほとんどは一般市民でしたが、彼らは燃えて灰と化し、蒸発し、黒こげの炭となりました。その中には、私の家族や、351人の同級生もいました。

その後、数週間、数カ月、数年にわたり、何千人もの人たちが、放射線の遅発的な影響によって、次々と不可解な形で亡くなっていきました。今日なお、放射線は被爆者たちの命を奪っています。

広島について思い出すとき、私の頭に最初に浮かぶのは4歳のおい、英治です。彼の小さな体は、何者か判別もできない溶けた肉の塊に変わってしまいました。彼はかすれた声で水を求め続けていましたが、息を引き取り、苦しみから解放されました。

私にとって彼は、世界で今まさに核兵器によって脅されているすべての罪のない子どもたちを代表しています。毎日、毎秒、核兵器は、私たちの愛するすべての人を、私たちの親しむすべての物を、危機にさらしています。私たちは、この異常さをこれ以上、許していてはなりません。

私たち被爆者は、苦しみと、生き残るための、そして灰の中から生き返るための真の闘いを通じて、この世に終わりをもたらす核兵器について世界に警告しなければならないと確信しました。くり返し、私たちは証言をしてきました。

それにもかかわらず、広島と長崎の残虐行為を戦争犯罪と認めない人たちがいます。彼らは、これは「正義の戦争」を終わらせた「よい爆弾」だったというプロパガンダを受け入れています。この神話こそが、今日まで続く悲惨な核軍備競争を導いているのです。

Nine nations Nine nations still threaten to incinerate entire cities, to destroy life on earth, to make our beautiful world uninhabitable for future generations. The development of nuclear weapons signifies not a country's elevation to greatness, but its descent to the darkest depths of depravity. These weapons are not a necessary evil; they are the ultimate evil.

On the seventh of July this year, I was overwhelmed with joy when a great majority of the world's nations voted to adopt the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons. Having witnessed humanity at its worst, I witnessed, that day, humanity at its best. We hibakusha had been waiting for the ban for seventy-two years. Let this be the beginning of the end of nuclear weapons.

All responsible leaders will sign this treaty. And history will judge harshly those who reject it. No longer shall their abstract theories mask the genocidal reality of their practices. No longer shall "deterrence" be viewed as anything but a deterrent to disarmament. No longer shall we live under a mushroom cloud of fear.

To the officials of nuclear-armed nations -- and to their accomplices under the so-called "nuclear umbrella" -- I say this: Listen to our testimony. Heed our warning. And know that your actions are consequential. You are each an integral part of a system of violence that is endangering humankind. Let us all be alert to the banality of evil.

To every president and prime minister of every nation of the world, I beseech you: Join this treaty; forever eradicate the threat of nuclear annihilation.

When I was a 13-year-old girl, trapped in the smouldering rubble, I kept pushing. I kept moving toward the light. And I survived. Our light now is the ban treaty. To all in this hall and all listening around the world, I repeat those words that I heard called to me in the ruins of Hiroshima: "Don't give up! Keep pushing! See the light? Crawl towards it."

Tonight, as we march through the streets of Oslo with torches aflame, let us follow each other out of the dark night of nuclear terror. No matter what obstacles we face, we will keep moving and keep pushing and keep sharing this light with others. This is our passion and commitment for our one precious world to survive.

9カ国は、都市全体を燃やし尽くし、地球上の生命を破壊し、この美しい世界を将来世代が暮らしていけないものにすると脅し続けています。核兵器の開発は、国家の偉大さが高まることを表すものではなく、国家が暗黒のふちへと堕落することを表しています。核兵器は必要悪ではなく、絶対悪です。

今年7月7日、世界の圧倒的多数の国々が核兵器禁止条約を投票により採択したとき、私は喜びで感極まりました。かつて人類の最悪のときを目の当たりにした私は、この日、人類の最良のときを目の当たりにしました。私たち被爆者は、72年にわたり、核兵器の禁止を待ち望んできました。これを、核兵器の終わりの始まりにしようではありませんか。

責任ある指導者であるなら、必ずや、この条約に署名するでしょう。そして歴史は、これを拒む者たちを厳しく裁くでしょう。彼らの抽象的な理論は、それが実は大量虐殺に他ならないという現実をもはや隠し通すことができません。「核抑止」なるものは、軍縮を抑止するものでしかないことはもはや明らかです。私たちはもはや、恐怖のキノコ雲の下で生きることはしないのです。

核武装国の政府の皆さんに、そして、「核の傘」なるものの下で共犯者となっている国々の政府の皆さんに申し上げたい。私たちの証言を聞き、私たちの警告を心に留めなさい。そして、あなたたちの行動こそ重要であることを知りなさい。あなたたちは皆、人類を危機にさらしている暴力システムに欠かせない一部分なのです。私たちは皆、悪の凡庸さに気づかなければなりません。

世界のすべての国の大統領や首相たちに懇願します。核兵器禁止条約に参加し、核による絶滅の脅威を永遠に除去してください。

私は13歳の少女だったときに、くすぶるがれきの中に捕らえられながら、前に進み続け、光に向かって動き続けました。そして生き残りました。今、私たちの光は核兵器禁止条約です。この会場にいるすべての皆さんと、これを聞いている世界中のすべての皆さんに対して、広島の廃虚の中で私が聞いた言葉をくり返したいと思います。「あきらめるな！（がれきを）押し続けろ！　動き続けろ！光が見えるだろう？そこに向かってはって行け」

今夜、私たちがオスロの街をたいまつをともして行進するにあたり、核の恐怖の闇夜からお互いを救い出しましょう。どのような障害に直面しようとも、私たちは動き続け、前に進み続け、この光を分かち合い続けます。この光は、この一つの尊い世界が生き続けるための私たちの情熱であり、誓いなのです。

（広島女学院大学ホームページより）

2017年度 広島女学院同窓会東京支部 会計報告

2017年4月1日～2018年3月31日

収入			支出		
費目	金額	摘要	費目	金額	摘要
前年度繰越金	557,553		支部ニュース費	236,979	印刷代、送料、封筒代
支部会費	582,000		役員会費	125,140	役員会会場費、交通費
受取利息	1		支部活動費	71,371	あやめの会、クリスマス会
			通信事務費	56,017	支部ニュース以外の通信費
			関東ﾌﾞﾛｯｸ分担金	25,945	夏雲の集い
			次年度繰越金	624,102	
合計	1,139,554		合計	1,139,554	

上記の通り会計報告をいたします。
2018年3月31日　会計 松岡理乃

監査の結果、収支報告に相違ありません。
2018年4月3日　会計監査 重本ゆり

2018年度 東京支部役員

支部長	白井京子 （現・瀧口）高23、文英5
副支部長	滋野順子 （前垰）高19
副支部長	桜井悦子 （瀬川）高23、文英5
書記	佐藤美代子（池田）高22、文日4
会計	松岡理乃 （木沢）高30
宗教委員	千代崎満子（白根）高33、文英15
編集長・関東ﾌﾞﾛｯｸ長	坂下 惠 （杉田）文英1
編集委員	小林悦子 （土生）高46
〃	平田香里 （高原）高47
〃	野口裕美 （伊藤）高44、文英26
実行委員	小池明子 （田辺）高14
〃	西山朋子 （佐々木）高22、文英4
〃	木村貴子 （阿波）高32、文英15
〃	氏原歌子 （佐伯）高32、文英14
会計監査	重本ゆり （重本）文英8

今年度の企画

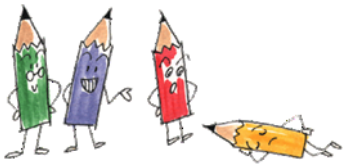
＊ **支部ニュース発行**
71号(5月)、72号(11月)

＊ **あやめの会** 6月24日(日)
迎賓館見学 ＆
ランチ（オーバカナル紀尾井町）

＊ **夏雲の集い** ／ 関東ﾌﾞﾛｯｸ主催
7月7日(土) 銀座教会
原爆死没者追悼礼拝
講演:森田裕美さん(高44)
（中国新聞論説委員）

＊ **クリスマス会**
（12月）

ーシリーズー　“私からあなたへ　同窓生の輪”　41



「人生は千変万化」

關　理津子（高校 34 回/文英 17 回）

女学院中学校に入学し、まだ皆どこかぎこちない頃、席が近い人と家族ごっこをすることになりました。経緯はよく覚えていませんが、まず私が母親役になり、長男、長女等が決まった記憶があります。その日から４０年以上経った今でも中１のクラスメイトには『ママ』と呼ばれています。今日は中１から『ママ』と呼ばれた私の人生のひとコマのお話をしたいと思います。

中学生の一番の思い出は３年生の時、吉田徳子先生引率のアメリカ研修旅行に参加したことです。日本には今ほどアメリカのエンターテインメントはなかったので、ディズニーランドやユニバーサルスタジオは夢の世界のようでしたし、映画館の巨大なポップコーンや飲み物に目を丸くしたものです。新世界にすっかり魅了された私はいつかアメリカで暮らしたいと思うようになりました。この旅行をきっかけに英語が大好きになり、高校時代はスピーチコンテストに度々出場しました。女学院大学に進学し、３年生の時に渡米しました。英語学校に通い、将来はアメリカで就職したいと思っておりましたが、スペイン語にも興味を持つようになり、友だちの伝で、中米グァテマラ共和国でスペイン語を勉強し始めました。

ここで簡単にグァテマラの紹介をします。メキシコの南に位置し、公用語はスペイン語、通貨はケツァル、人口は約１７００万人です。首都グァテマラシティは標高１５００メートルにあります。マヤ文明が栄えた地で、国民の過半数はマヤ系のインディヘナです。国民性は情に厚く、陽気です。気候は雨季と乾季に分かれています。

日本人学校（グァテマラ）

食べ物は豊富で美味しく、一年中色々な花が咲き乱れ、常春の国と呼ばれるように年間を通じ快適な気候です。治安ですが、ビルやレストランや学校の入り口には大抵マシンガンを持った警備員が立っている状況からご想像頂けると思います。在グァテマラ日本人学校のスクールバスには必ず銃を持った警備員が同乗していました。街中にいる警備員のおかげか、１２年間のグァテマラ滞在期間中、一度も危険な目に合ったことはありません。

話は戻りまして、スペイン語学校を卒業する頃、JICA（国際協力機構）の現地採用のお話を頂き、通訳兼コーディネーターとして勤め始めました。

通訳（JICA）

固形廃棄物処理事業の時はゴミの山の中で暮らす人々にインタビューをしたり、下水道整備計画調査の時は排水状況視察のため、貧民街にも行きました。寄生虫調査の時には寄生虫の標本に囲まれて食事を取らざるを得なかったこともありました。仕事がお休みの時は孤児院でボランティア活動をしていました。貧困が原因の捨て子、虐待児、そして１９９６年の平和条約の調印まで続いていた内戦の犠牲となった孤児が大勢いました。ある日、カップにコーヒーを注ぎ始めると一人の男の子が突然泣き叫びました。スタッフに話を伺うと、その子の母親がコーヒーを注ごうとした時、ゲリラが家に押し入り、目の前で両親は殺されたそうです。心の傷は簡単には癒えませんが、少しでも役に立てればと祈る思いで孤児院に通っていました。あの子どもたちが心の傷を癒してまっすぐ生きていることを祈るのみです。

父が体調を崩し、日本に帰国しました。看病をしながら、保育士と幼稚園教諭の資格を取得しました。実習で児童養護施設を訪れた時、日本は物質的に豊かだと実感すると同時にグァテマラの子どもたちを思い出し、胸が痛みました。父の他界後、私は幼稚園に就職し、通訳をボランティア活動としました。３８歳にして日本で社会人デビューです。帰国して味わったリエントリーショックから母国である日本に慣れるまで７年かかりました。

その頃、良縁に恵まれ、東京に引っ越してきました。東京は美術館や劇場が充実しており、様々な文化をいつでも楽しめる一方、人の多さ（東京都の人口はグァテマラ在住時の人口の１．５倍以上）、便利だけど複雑な公共交通機関には９年経っても閉口しています。数年前から茶道を嗜むようになり、４５歳の手習いで、着付けもできるようになりました。

海外生活１４年、帰国して１９年の月日が流れました。お茶室で正座している和服姿の自分をふと客観視する時、「人生って面白い」と思います。アメリカに憧れていた私が、グァテマラで生活し、そして今、故郷の広島ではなく、東京に住んでいます。中１で『ママ』と呼ばれた時には想像もできなかったことです。人生は予想や計画を立てることはできますが、必ず実現するとは限りません。でも、予想と全く違う状況で楽しいこと、嬉しいことを沢山見つけることもできます。以前は、人生は思うようにいかないことだらけだと思うこともありましたが、実はそれがその人に与えられた道なのだと思えるようになってきました。これから１０年後、２０年後、どこで何をしているのか知る術はありませんが、人生の積み重ねである一日一日を大切に過ごしたいと思う今日この頃です。

2018 ホームカミングデー 報告

4 月 20 日（金）、ゲーンスホール別棟チャペルで同窓会全国代表者会議が開催されました。
全国からの代表、約 40 名が集まり、関東ブロックからはブロック長 坂下 惠と埼玉支部長 清水敬子が出席しました。礼拝で小田部三恵子牧師から「共に苦しむ喜び」と題したメッセージを頂いた後、総会に移り、全議案が承認された後、各ブロックの活動報告を行いました。

翌、21 日（土）はリーガロイヤルホテルでのホームカミングデー。今年のテーマは、「こころをひとつに～あやめの伝統をつなぐ～」。

広島女学院同窓生の歌「どんなに時が流れても」の全員合唱で開会し、礼拝では、湊院長・学長から今年度の大学の入学者が定員を超えたという嬉しいご報告の後、「土の器はもろいが、ひびの間から香りが放たれる。器の中にイエスキリストを入れ、キリストの香りを放ち、広島女学院を愛し続けるものでありたい。」とメッセージを頂きました。

大矢会長の開会のことば、ご来賓・恩師の紹介に続いて、クワイヤアイリスの合唱で宗教曲や映画音楽などを聴かせて頂き、今年度から中高の校長に就任された渡辺信一先生の乾杯で会食に移りました。

嬉しい再会のひと時に名残は尽きませんでしたが、讃美歌、校歌を歌い、功野博子実行委員長（高 18）の閉会の言葉でお開きとなりました。今年も 300 名を超える参加者で盛会でした。（坂下）

夏雲の集い 2018

関東ブロック主催

～原爆死没者追悼礼拝 ～

関東ブロックでは、母校での 350 名の犠牲者を追悼し平和に向き合う集会として、故 山本（秦）知子先生の提唱による「夏雲の集い」を 1988 年から毎年開催してまいりました。31 回目の今年は銀座教会での追悼礼拝に続き、同窓生で中国新聞論説委員の森田裕美さんのお話を伺います。原爆に関わる記事の執筆も多く、興味深いお話を伺えることと思います。他支部の方、同窓生以外の方もお誘いください。

7月7日（土）

13 時 30 分～16 時 30 分

（受付 13 時より）

日本基督教団 銀座教会 大礼拝堂

東京都中央区銀座 4 丁目 2 番 1 号

JR 有楽町駅中央口下車 徒歩 5 分
東京メトロ銀座駅 C6 または C8 出口よりすぐ

13：30～ **礼拝・説教**（高橋 潤 牧師）
14：00～ **講演 森田裕美さん（高 44 回）**
テーマ「『被爆体験』を伝えるということ」
15：30～ 茶話会

＜森田裕美さん プロフィール＞
中国新聞論説委員。広島女学院中高（高校 44 回）、お茶の水女子大学卒業後、中国新聞社入社。福山支社などをへて、報道部、文化部でおもに原爆平和関連の報道に携わる。
日本政府による被爆者援護問題のほか、世界の核被爆者の実態、核をめぐる表象、被爆の記憶をどう継承するかなどについて取材。プライベートでは、二児の母。

会計 松岡

支部会費納入のお願い！！

日頃より支部活動に対してご支援･ご協力を頂き、感謝いたします。
私たちの活動は会員の皆様の会費に支えられています。

2018 年度の会費（2,000 円）の納入をお願いいたします。

80歳以上の方の会費は免除ですが、お気持ちが有りましたらお願いいたします。
振替用紙には電話番号をご記入下さい。銀行振込もご利用いただけます。

＜銀行振込＞ 三菱 UFJ 銀行 高田馬場支店 普通預金 0473771 広島女学院同窓会東京支部